筒井新聞　第 335 号（2）

“NO”を言わない道徳教育

1．NO を最初に教える国

イギリスにいる孫娘は、現在 4 歳であるが、1 歳から保育園へ通いだした。満 2 歳の時に、1 カ月半の間子守に行った律子ばあちゃんは、しょっちゅう”No”というので、面食らっていた。そうしたら、保育園では、幼児は自分の気に入らないときには”No”と言うことを奨励されていると聞いて大変驚いてしまった。そのために、ある時期は何でも”No”という習慣が身についてしまった。もちろん、一定期間が過ぎると”Yes”と”No”をバランスよく言うようになって一安心したが。

日本ではどうだろうか。”No”を奨励されるとは思えない。むしろ、「駄々をこねないで、”Yes”と言いなさい」と躾けられるのではないだろうか。そして、小学校・中学校における「道徳教育」では、集団に同調すること、言葉で表現されていなくても集団の最大公約数が求めている「空気」を読んで、それに合わせることが求められる。「おもてなし」は、時に好みを聞かないで忖度に基づくお仕着せのメニューを提供することが「親切心」の発露になったりする。

政府の意思決定であっても、首相が自分の思考と知見を駆使して政策決定するのではなく、天皇が望んでいるらしいことを実行しようとしたのが東條英機首相であったことを先に書いた[1]。また、ドイツでは、各党がマニフェストを掲げて選挙戦を戦い、連立を余儀なくされるときにはマニフェストを逐条的に作り直すために、5 カ月間の期間と手続きを費やして政策の言語化を明瞭に行うことを紹介した[2]。それに引き換え、前の民進党代表・前原氏が、密室に小池都知事を訪ねて自党の解体的合流を申し入れ、それが政策協定の議論を抜きに行われたために民進党が今も混迷していることを述べた。

政治家たちの政策協定にしろ、一般市民が答える世論調査といった軽いレベルの議論にしろ、個人個人の意見形成が明快になされているのかどうかが分かりにくい。世論調査の結果「どちらかわからない」という選択肢を選んだ人が 3 分の 1 ほどいる。意見形成をしなければ、投票行動もあいまいになる。投票率が 30%台だということも、民主主義の基盤を損ねている。そもそも、日本の道徳教育というのは、集団の空気に白紙委任するという同調圧力への順応を刷り込んでいるのではないか。

2．公論形成の前提としての個人の意見

---

[1] 「忖度となすり合い」『筒井新聞』第 333 号（2）http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/333/333-2.pdf

[2] 「ドイツの 1968 年」『筒井新聞』第 333 号（1）http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/333/333-1.pdf

同様に、先般閣議決定された「第 5 次エネルギー基本計画」をはじめとする様々な原子力政策が、論理矛盾が明白な「政策」の数々をつなぎ合わせて作られている事実を紹介した[3]。

原子力市民委員会では、熟議民主主義に基づく原子力政策の決定手続きの実現をめざしている[4]。しかし、現在の自民党政権は論理的整合性を放擲して、既存利権を擁護する政治家および官僚の利益増進に血道をあげている。その目的のために議論の証拠となる文書の破棄・隠ぺいや改ざんが横行している。民主党政権下では、エネルギー・環境会議が組織され、「革新的エネルギー・環境戦略」が論議された[5]。その議論が行われている時期は、広く市民たちの注目を集め、アンケートに対する回答率も高かった。だから、日本人が無思想なわけではない。しかし、ある程度誘導されないと意思表示や発言を起動しない体質であることは事実であるらしい。その発言を起動する活力を生み出すには、違う意見には”No”といって個人の意見を明示する訓練が必要なのではないだろうか。

3．同調圧力とヘイトスピーチ

同調圧力のもとにある人が大きな声で発言する場面で目立つのがヘイトスピーチである。周囲からの反論がなく、燃える気持ちで大っぴらに大胆な攻撃的言辞を弄することができる。

最近、ある住民運動のグループとともに、役所による一方的な都市計画決定を批判する文書を作成した。その中に、私はドイツの脱原発の倫理委員会が行った大規模な市民対話集会と、韓国における新古里 5・6 号機に係る 500 人規模の市民たちの合宿討論による「熟議民主主義」を引き合いに出して、日本の役所もそのような市民との対話を行うべきだ、という主張を書き込んだ。

しかるところ、その住民運動グループから、「ドイツや韓国はけしからん国だ。そんな国をお手本にするなんてとんでもない」といわれて、その例示削除の憂き目にあった。私が、「外国の悪口を言って、自分たちの集団意識を高めるあなた方の言説は偏狭な『ヘイトスピーチだ』」と反論したところ、「プロ市民だ」「共産党みたいだ」といって非難され、「私たちはお上に立てつくような不埒な集団ではない。ただ、今度の都市改造に際して私たちの住環境を改善してほしいとおすがりするために、やむを得ず声を挙げているだけだ」と説明された。

日本では、個人が独自の意見を確立して統治機構に対して自らの権利を主張することは一般市民にとって不道徳なことと認識されているようである。結果として、私はその集

---

[3] 「虚構の上に立つ原発」『筒井新聞』第 331 号（3）http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/331/331-3.pdf

[4] 「脱原発の公論形成へ向けて」『原発ゼロ社会への道 2017』原子力市民委員会、2017 年、 p.277

[5] 「革新的エネルギー・環境政策」エネルギー・環境会議、2012 年 9 月 14 日
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy09/pdf/20120914/20120914_1.pdf

団から排除されてしまった。

4．「天声人語」の腰抜け解説

たまたま今日（7 月 15 日）の『朝日新聞』の「天声人語」欄に 100 年前の 7 月に起きた富山県魚津市から全国に広がった「米騒動」について、次のような解説を述べているので驚いた。

「米騒動に加わった女性たちの子や孫が、一族の恥であるかのように口を閉ざすこともありました」と魚津市歴史民俗博物館の麻柄一志館長（63）は話す。無学な女性たちが重大な結末を招いたとの見方が地元に広がったためらしい。コメの一粒も奪わず、検挙者もいなかった。それなのに女房連が暴れ、米蔵を打ち壊したかのように語り継がれてしまった」。近年、地元では再評価の機運が高まる。起きたのは役場や富商に対する哀願であって、暴動ではなかった。その史実を広めようと舞台や企画展、記録映画の地道な政策が続く」

5．日清戦争時代のヘイトスピーチ

中勘助は、日清戦争時代には小学生であった。その時の担任の先生と級友たちとのやり取りを『銀の匙』に、次のように書いている。

戦争が始まって以来仲間の話は朝から晩まで大和魂とちゃんちゃん坊主でもちきっている。それに先生までがいっしょになって、まるで犬でもけしかけるようになんぞといえば大和魂とちゃんちゃん坊主をくりかえす。私はそれを心から苦々しく不愉快なことと思った。先生は予讓や比干の話はおくびにも出さないでのべつ幕なしに元寇と朝鮮征伐の話ばかりをする。(中略)。

先生はれいのしたり顔で

「日本人には大和魂がある」

といっていつものとおりシナ人のことをなんのかんのと口ぎたなくののしった。それを私は自分がいわれたように腹にすえかねて

「先生、日本人に大和魂があればシナ人にはシナ魂があるでしょう。日本に加藤清正や北条時宗がいればシナにだって関羽や張飛がいるじゃありませんか。それに先生はいつかも謙信が信玄に塩を贈った話をして敵を憐れむのが武士道だなんて教えておきながらなんだってそんなにシナ人の悪口ばかしいうんです」(中略)。

この話は、結局先生も級友も論理的に著者を説得できなくて、先生は教員室で著者を

「困るねえ」と愚痴っているだけである[6]。

同書には、終身の時間が強い反感を持たせるものであることも、強い筆致で描いている。（教科書に）「載せてある話といえばどれもこれも孝行むすこが殿様から褒美をもらったの、正直者が金持ちになったのという筋の、しかも味もそっけもないものばかりであった。おまけに先生ときたらただもう最も下等な意味での功利的な説明を加えるよりほか能がなかったので…」という具合である[7]。今日の日本の義務教育の「道徳教育」もその平板な通俗的協調主義と功利主義は変わらないと思う。日本社会における大人の精神を育てるという方法論は、この 100 年余り少しも変わらなかったのではないだろうか。

（2018 年 7 月 15 日　　哲＋律）

---

[6] 中勘助『銀の匙』岩波文庫、1935 年,pp.126-130

[7] 中勘助、前掲書,pp.150-152